

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2018年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻		
研究代表者 (2019年3月現在のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年・18WV002K		中野 悠稀 印
指導教員	所属・職名		氏名
	異文化コミュニケーション学部 教授		森 聡美 印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 人文 ・ 社会	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	Anaphora resolutions in simultaneous/early sequential Japanese-English bilingual adults		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2019年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程後期課程1年		中野 悠稀
研究期間	2018 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 193,905円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

バイリンガルはある特定の構造においてモノリンガルと異なる理解や産出を示すが、このような現象がバイリンガルの言語知識または処理のどちらに起因しているのかという問題は、バイリンガリズム・第二言語習得領域において議論されているテーマの一つである。本研究は、日英成人バイリンガルを対象として前方照応に焦点を当て、言語処理の観点から2群間の差が説明可能であるかを検討することを目的としている。実験1ではオンライン(自己ペース読み課題)、オフライン(容認性判断課題)課題の結果の比較、実験2では認知負荷の有無(二重課題法による)による結果の比較、加えて事後インタビューを実施することにより、2群の差に起因している要因を明らかにすることを目指す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[日英成人バイリンガル] [言語処理] [前方照応]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

今年度は、研究計画と実験デザインの確定を主な目標として掲げ、それに伴い必要となる関連情報の収集、先行研究調査、実験に必要な機器の調達とセットアップ、刺激文の作成・検討、言語背景調査に用いる質問紙の検討、実験パイロット、被験者募集を行った。全体的に年度開始時に計画した予定通りに進み、目標は概ね達成されたと考える。以下、上記の項目ごとに活動内容について述べた後、現段階で決定している実験デザインを紹介する。

【研究遂行に当たって必要となる情報の収集】

研究の背景知識の獲得のため、日本語・英語の前方照応の統語・談話的・認知的原理、バイリンガルの二言語処理と認知機能の関係、認知機能と非言語・言語処理の関係、について情報収集を行った。

【先行研究調査】

研究計画と実験デザインの確定に向け、バイリンガル-モノリンガル間の理解・産出の差をテーマとして扱う論文を中心に先行研究の調査を行った。また、前述の関連情報の収集により得られた知識と合わせて、博士論文の草稿(目次～方法部分)を執筆した。

【実験に必要な機器の調達とセットアップ】

実験に必要な PC を購入し、PsychoPy という心理学実験設計用ソフトウェアを使用してオンライン課題(自己ペース読み課題)や二重課題の負荷量を決定するために事前に行う作動記憶容量テストのセットアップに着手し、現在に至る。

【刺激文の作成・検討】【言語背景調査に用いる質問紙の検討】

先行研究をもとに刺激文(ターゲット文 32 個、ダミー文 64 個)の作成を行った。詳細は以下の《研究方法:刺激》を参照してほしい。また、言語背景調査に用いる質問紙の検討を行い、言語背景全般(各言語の熟達度や使用頻度)に関する質問紙 Language and Social Background Questionnaire (Anderson et al., 2018) とコードスイッチング行動に関する質問紙 Bilingual switching questionnaire (Rodriguez-Fornells et al., 2012) を使用することが決定した。

【実験パイロット】

今年度 1 月より実験パイロットを開始し、作成した刺激文を用いて日本語母語話者や日英バイリンガルを対象にオフライン課題(容認性判断課題)を行っている。来年度以降はオンライン課題のパイロットにも着手し、予備的な結果分析や本調査に向けた改善を行っていく予定である。

【被験者募集】

実験デザインの確定に伴い必要な被験者の人数や条件が確定したため、2019 年度春学期から順次募集を行う予定である。その準備段階として、今年度は配布資料(研究の概要や同意書[日/英])の作成、謝金額の検討、実験全体の所要時間の決定等を行った。

《研究設問》

- RQ.1 バイリンガルは日本語・英語のオフライン課題においてモノリンガルと同様の前方照応の解釈を示すか
 RQ.2 日本語・英語のオンライン課題ではバイリンガル-モノリンガル間の読み時間(RT)に差が見られるか
 RQ.3 バイリンガル、モノリンガル共に認知負荷ありの課題では認知負荷なしの課題に比べて RT に差が見られるか

《研究方法》***被験者**

被験者は、18-25 歳程度のバイリンガル、日本語母語話者、英語母語話者それぞれ 24 人ずつを対象とする。バイリンガルは、日本語と英語を自然環境下で習得しており、両言語を日常的に使用し同等の熟達度を示す者を対象とする。

***刺激**

Nagano (2015)、Chamorro et al.(2016)を元にターゲット文を作成した。ターゲット文は、「～している間」を含む従属節と主節からなり、それぞれの節は主語・他動詞・目的語の 3 要素で構成される。全 32 種類あり、以下の要因 1 と 2 を組み合わせてさらに 4 条件の文を作成した (a-d)。

研究成果の概要 つづき

要因 1: 代名詞 (明示・脱落)

要因 2: 先行詞 (+トピックシフト[TS]・-TS)

要因 3: 格助詞 (-wa・-ga) ※日本語の文のみ

- a. 明示×-TS: まさきが絵を描いている間、彼は水を飲んでいます。
- b. 明示×+TS: まさきが絵を描いている間、彼女は水を飲んでいます。
- c. 脱落×-TS: まさきが絵を描いている間、 φ 水を飲んでいます。
- d. 脱落×+TS: まさきが絵を描いている間、 φ 本を読んでいます。

4つのリストが作成され、各リストとも被験者が各条件の文に出会う回数が均等になるようターゲット文が配分されている。ダミー文は 64 種類あり、本研究の焦点である前方照応とは関係の無い構造や「～している間」以外の接続詞や代名詞の代わりに名詞節が使用されている類似した構造の文が含まれているおり、4 リストとも共通である。リスト内の文はランダムに並んでいる。被験者は実験 1,2 の各課題において、異なるリストの文に対して回答するよう求められる。また、ターゲット文はオンライン、オフライン課題共に () 付きの導入文に続いて表示されている (以下参照)。

導入文: (まさきとれいなが同じ部屋にいます。)

実験文: まさきが絵を描いている間、彼は水を飲んでいます。

手順*①実験 1**オフライン課題 (容認性判断課題)

被験者は与えられた文について、「日本語の文として可能かどうか」を基準に容認性を判断する 5 段階 (1. 非常にあり得ない 2. あり得ない 3. どちらでもない 4. あり得る 5. 非常にあり得る) で評価することを求められる。今回は「可能かどうか」を「状況に即した意味を伝えるに当たってあり得る／あり得ないという感覚」と定義した。被験者には分からない問題がある場合も飛ばさずに全ての問題に答えるよう指示する。

オンライン課題 (自己ペース読み課題)

自己ペース読み課題は PC 上で行われる。PC の画面左端に+が表示され、キーボード上の指定されたキーを押すと実験文の最初のセグメントが+に代わって表示される。キーを押すごとに次のセグメントが表示されていき、キーを押してから次に押すまでの時間をセグメントごとの読み時間として計測する。実験文を全て読み終わると確認問題が表示され、実験文の内容に関して○か×で答えるよう求められる。確認問題を入れることにより、被験者に適当ではなくきちんと意味を取るために文を読むように促している。

②実験 2

実験 2 では実験 1 で用いた自己ペース読み課題を使用し、認知的負荷がある場合とない場合の 2 条件で課題を行う。認知的負荷ありの場合、被験者は数字の羅列を記憶しながら自己ペース読み課題を遂行することを求められる (二重課題法)。事前に作動記憶容量テストを行うことで、各個人に合わせた負荷量 (覚える数字の数) を課すことが可能となり、全員に同程度の負荷が課されている状態が作られるため、作動記憶容量の個人差が結果に影響しないと考える。

③事後インタビュー

実験 1, 2 での回答に関してなぜその回答を選んだのか、根拠を言語化して説明できるか、また、バイリンガル被験者の場合は彼ら／彼女らの観点からは自然であるか、母語話者の観点から考えた場合に容認性の判断は変わるか等について答えてもらう。

④基本情報・言語習得・使用背景に関するアンケート

上記全行程が終了した後、Language and Social Background Questionnaire (Anderson et al., 2018) と Bilingual switching questionnaire (Rodriguez-Fornells et al., 2012) を実施する。

※この (様式 2) に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書 (A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式) を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
なし

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
なし

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
なし

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

Nakano (July, 2019). Offline interpretation of Japanese pronominal subjects in Japanese-English bilingual adults. At the meeting of Japanese Society for Language Sciences. Tohoku University, Japan.